

三輪博士の編まれた“臺灣害蟲名彙”は正に此の要請に應へられたものと言ふべきで、各方面の主要害蟲 1088 種（後に追加として別に 344 種を加ふ）に就き、學名・和名・分布・加害を列記され、農作害蟲に對しては更に作物別にも一覽表が作製されてある。臺灣の害蟲相を大觀するにはこよなき文献と言へやう。尙著者が緒言に於て述べられて居る如く、“臺灣産農作物の害蟲は特に南方共榮圈地域と其の種類を等しくするものが多く、臺灣に於ける害蟲の基礎的調査は今後共榮圈内に於て活用される事が多々あると思はれる”から、此の意味に於ても本書の刊行は誠に意義深く且つ時宜を得たものと信ずる。更に主要文献を挙げられて居る點、又學名及び和名の索引を附されてある事も親切であり、讀者には嬉しい所である。紹介者は臺灣乃至南方の昆蟲に關心を有せられる方に是非一本を備へられん事を御薦めしたい。

（野村健一）

井 上 清 恒 著 生 物 學

B 5 判 524 頁 462 圖 昭和 18 年 8 月 内田老鶴園 定價 12.40

近世生物學の研究は微に入り細を穿つ様になり、その分析も又愈々精細となりつつあることは斯學進展の必然的結果であるが、稍もすれば生物を材料とする物理學や化學に墮する恐れがある。この様になれば應用物理學や應用化學であつて學としての生物學の自立性が喪失する。特殊研究の中に常に生命の學としての把握と反省がなければ眞の生物學とはなり得ない。又研究は深くなるに従つて狭くなるから生物學全般の見透しは益々困難となり、果は學海にさまよふ自己の進路の決定も困難な場合もある。この故に生物學概論の存在理由がある。生物學概論は豊富なる學識に加ふるに一貫した理念を以つてしなければ纏りがつかない。この意味でその人を得ることが大切となる。

序文によれば著者は故五島清太郎先生によつて生物形態に對して開眼され、谷津直秀先生によつて形態と機能の相關に關して興味を起され、最後に橋田邦彦先生の門下に連り、生體の全機性と働きに即して生命現象を把握することを教へられ、畢生學道の處を得たと言ふ。本書は橋田先生還曆の賀筵に献ず可く起稿されたもので巻頭にある同先生の題字『全機發處萬物生々』はとりもなほさず本書を貫く理念である。著者の豊富なる學識と眞摯なる學風とは夙に定評のある所である。傳へ聞くに著者が講壇に生物學を講ずるや學生は皆その熱に打たれると言ふ。従つて生物學概論の著者としては誠に適任者と言ふ可きである。

本書は内容を大別して三部となし、第一部生物學序論に於ては生物學の學的性格を明にし、生物學内の専門分科の構成を示し、次に生物學の史的展開が示されて居る。第二部形態學に於ては生物體の構造とその生成變易の過程を追求し、生命現象をその一面たる形態の相に於て把握するものとして、細胞形態、細胞分裂、組織形態、授精現象、性決定、生殖現象、發生機構、形態調節、遺傳、變異と新種形成、形態比較等が述べられて居る。第三部生機學に於ては生命現象をその流動の相に於ける生々變易の姿に於て把握する部門となし、細胞生機學、組織生機學、器官生機學、協關生機學、環境生機學の順序で展開されて居る。

日本の學者の業績が多數引用されて居ることも斯學に於ける日本の水準を示すものとして喜ばしい。内容の充實、豊富なる挿圖、上等の紙質から見て生物概論中の白眉であつて、著者の努力と精進に感嘆すると同時にこの様な大著の出現を本邦學界の爲に祝福したい。

（山本時男）